

総務省「スマートスクール・プラットフォーム実証事業」、
 文部科学省「次世代学校支援モデル構築事業」
 合同委員会（兼 成果報告会）（第3回） 議事録

日 時	平成 30 年 3 月 7 日（水）13 時 00 分～15 時 15 分	
場 所	Learning Square 新橋 4 階 4AB 会議室／Web 会議	
出 席 者	評価委員	清水委員長、上原委員、小泉委員、高橋委員、東原委員、毛利委員
	事業推進委員	清水委員長（評価委員兼任）、秋元委員、高橋委員（評価委員兼任）、玉置委員、藤村委員
	実証地域 発表者	大阪市 大阪市教育委員会事務局学校経営管理センター 山本課長代理 大阪市教育委員会事務局学校経営管理センター 黄担当 日本電気 塚原 PM
		西条市 西条市教育委員会 渡部専門員兼指導係長 四国通建 服部 PM
		渋谷区 渋谷区教育委員会 加藤副参事 内田洋行 塚本 PM
		新地町 新地町教育委員会 伊藤指導主事兼社会教育主事 NTT コミュニケーションズ 稲田 PM
		奈良市 奈良市教育委員会 谷係長 富士通 蛭子 PM
		総務省
	文部科学省	生涯学習政策局 情報教育課 梅村課長、松本課長補佐、窪田係長、坂本専門職、多田環境整備担当
配 布 資 料	資料 1 実証地域現状説明資料	
	資料 2 データ活用モデルパターン（案）	

	<p>資料3 スマートスクール・プラットフォームの標準化に関する資料</p> <p>資料4 横断的効果検証について</p> <p>資料5 パブリッククラウドを利用した場合のセキュリティ要件の整理について</p>
<p>議事要旨</p>	<p>(1) 開会</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 文部科学省より挨拶 ● 総務省より挨拶 ● 清水委員長より挨拶 <p>(2) 実証地域からの現状説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大阪市より、資料1-1(大阪市による平成29年度成果報告)に基づいて説明 ● 質疑応答 <p>【玉置委員】</p> <p>p.3,5のダッシュボードについて。学校現場を考えるとなかなか時間が取れない中で、ダッシュボードにメッセージが出ることは考えているか。あるいはこれらのデータを指導者が読み解いて手を打つのか。</p> <p>【山本課長代理】</p> <p>早期対応のため、メッセージ機能をつけてアラート表示を考えている。児童生徒の欠席が3日続いた場合等には、担任も校長も見られる形でアラートが表示される想定。</p> <p>【秋元委員】</p> <p>p.3「解決しようとする課題」の「授業の理解状況の把握」について。毎授業で児童生徒個別の理解度を入力するとすると教員の負担が増えるのではないか。</p> <p>【山本課長代理】</p> <p>スタート時は单元ごとでの入力を考えている。教員に負担がかからないよう单元テスト等も活用しながら進める。</p> <p>【藤村委員】</p> <p>p.3,5のダッシュボードについて。インターフェースが文字と数字ベースだが、見やすいように色分けをする等の教員が苦勞せずに分析できるようにするための工夫についてどう考えているか。</p> <p>【山本課長代理】</p> <p>ご指摘いただいた点も今後考えていきたい。</p> <p>【東原委員】</p> <p>教員と保護者とが会話しながらダッシュボードで児童生徒の情報を見ることも大切かと思う。保護者に見せてよい情報とそうでないものの区別ができるとういのでは</p>

	<p>ないか。</p> <p>【山本課長代理】</p> <p>懇談会では校務支援端末を用いて保護者と懇談をしたいと考えている。見せられる情報か否かを検討していきたい。</p> <p>【毛利委員】</p> <p>p.2について。対象学年が小学4年生（3校）、中学1年生（1校）、中学2年生（1校）とのことだが、来年度以降はどうなるか。</p> <p>【山本課長代理】</p> <p>そのまま対象学年が1つずつ上がる。同じ児童生徒の経年変化を追う。</p> <p>【毛利委員】</p> <p>素晴らしい取り組み。小学5年生では文部科学省の情報活用能力調査等もあるため、対象児童が5年生になった際はそのような調査を行うといろいろな結果が出るかと思う。</p> <p>【小泉委員】</p> <p>p.8「セキュリティ」について。「児童生徒ログインは年・組・番号を選択し、パスワードを入力するログイン認証」とあるが、クラス替えをすれば当然児童生徒の年・組・番号が変わる。各自がパスワードを変更でき、固定パスワードを使い回すことはないと理解してよいか。</p> <p>【日本電気 塚原 PM】</p> <p>パスワードは各自で変更可能であり、使い回すことはない。</p> <p>【小泉委員】</p> <p>児童生徒もパスワード変更のインターフェースを理解しているのか。定期的に変更を促すアラートがでる仕組みか。</p> <p>【日本電気 塚原 PM】</p> <p>理解していただくよう常日頃からアナウンスする。学年が上がる際に必ず変更する等して一定期間を置いて運用上でカバーする。現在はアラートが出る仕組みはなく、指導で行う想定。</p> <p>【高橋委員】</p> <p>p.2に「個人情報保護審議会に諮問予定」の表記が散見される。現在は識別コードで学習情報を管理しているのであれば、今までは大阪市個人情報保護条例第6条関係については諮問していなかったと理解してよいか。</p> <p>【山本課長代理】</p> <p>今までの教材データはパブリックにおいて、げたばこ方式で運用されていたようである。そのため今回データを連携する中で初めての諮問対象となろうかと考えてい</p>
--	---

る。

【清水委員長】

p.8「システム概念図」について。左図によると、平成30年度は学習データの連携をしないと考えてよいか。

【山本課長代理】

p.7の②にあるように、平成30年8月から校務・一部学習系データを組み合わせた帳票を出力する予定。

【清水委員長】

それでは平成30年8月以降は連携したデータでの利用が可能と考えてよいか。

【山本課長代理】

ご理解の通りでよい。2学期から活用する。

【清水委員長】

同じく p.8 について。右図のシステムは平成31年度4月から運用開始と考えてよいか。

【山本課長代理】

右図のダッシュボード画面は平成31年8月から画面で提示する。

【清水委員長】

平成31年8月からの運用となると、実証期間が半年間程度と非常に短くなってしまふ。

【山本課長代理】

画面上での提供は平成31年8月からであるが、帳票上では平成30年度から提供する予定。

【清水委員長】

同じく p.8 について。左右のシステムは教員が大差なく扱えるつくりなのか。また研修等はあるのか。

【山本課長代理】

どちらもリリース前に対象の小・中学校5校へ研修を行う。

【上原委員】

児童生徒のパスワード管理において、セキュリティを担保するためにはどのようなルールを児童生徒に伝えているかが重要である。すでに明文化されたルールがあれば伺いたい。

【日本電気 塚原 PM】

詳細は把握していないが、文字制限をかけるのが一般的。細かい点は別途ご説明する。

【上原委員】

p.6について。「要配慮個人情報」にあたる情報を現段階で定めているか。また要配慮個人情報の対象であった場合、その他の情報とどのような扱いの差がでるようにしているか。

【山本課長代理】

要配慮個人情報の対象は児童生徒の家族構成、家庭環境、発達状態、疾病、民族等としている。学校が紙ベースで持っている前述の情報をデータ化できないかという提案もあった。

【上原委員】

大阪市の条例にはどの機関が要配慮個人情報であると判断し、扱いの判断を決めるのかについて明記されていない。

【黄担当】

大阪市の要配慮個人情報は大阪市個人情報保護条例第 2 条で定義する予定であるが、第 2 条の定義は平成 30 年 4 月施行予定であるため現在は Web サイト等でも公開されていない。扱いについては個人情報審議会へ諮問する手続きの中で調整する。

- 西条市より、資料 1-2（西条市による平成 29 年度成果報告）に基づいて説明
- 質疑応答

【藤村委員】

個人カルテ、クラスカルテは資料上で詳しくご説明いただいた。管理職向けの学校カルテと教育委員会向けの自治体カルテについても詳しく伺いたい。

【渡部専門員兼指導係長】

学校カルテはクラスカルテと個人カルテから収集したものがベースとなる。他校と比較し、学力や学習意欲、21 世紀スキル等でどの位置にいるのかを相関図で見ることができるようになると思う。単位はクラス、学校あるいは自治体等で探っていこうと考えている。

【藤村委員】

スケジュールによると各カルテの開発は順を追って行われているが、クラスカルテ、個人カルテができた時点で他のカルテもデータとしてはそろっていると思われる。平行して開発し、実証期間を長くすることはできないか。

【渡部専門員兼指導係長】

教育委員会としても望んでおり、ハイピッチでの開発をお願いしている。

【玉置委員】

各カルテや指導改善ダッシュボードは、それらを見て管理職と教員のコミュニケー

ションが増すものでなくてはならない。単にクラスの様子がわかるだけでは、管理職としてアドバイスはしにくいように思える。

【渡部専門員兼指導係長】

まさに校長先生からもカルテをコミュニケーション材料のひとつにしたいのご意見をいただいた。ぜひ活用していきたい。

【秋元委員】

前述の藤村委員のご指摘通り、経年変化を見なくてはならないためぜひとも開発スケジュールは前倒しをお願いしたい。

教員だけでなく児童生徒も日々入力をしていくとのことであるが、児童生徒の意欲等も日々入力したデータから計れるのか。

【渡部専門員兼指導係長】

いくつか手段があるが、一案として「Evit」で確認を取ることを考えている。授業終了直後に数分時間を確保し、児童生徒向けに今日の授業がわかりやすかったか等のなるべく選択式にしたミニアンケートを実施し、後で教員が見て指導に活かしていける形としたい。

【秋元委員】

毎時間入力するとなると教員の負担が増えるのではないかと。またビジュアル的に見やすそうなダッシュボードであるが、アラート表示は出るのか。あるいは自身で読み解く必要があるのか。

【渡部専門員兼指導係長】

教員の入力も「Evit」を使用したいと考えている。また開発の第2弾として教員がタブレットでリアルタイム評価を行えるようにしたい。すべての入力を求めるわけではないが、教員と相談しながら負担のないように収集したい。

【東原委員】

長野県での実証経験から申し上げる。以下を参考にいただければ幸い。

p.6の指導改善ダッシュボードに関連して、クラスカルテや個人カルテのデータを全体の中にマッピングするのがとても重要だと感じている。前述の長野県の実証である教員が長野県内の学校から集まったデータを可視化し、自身の担当校の児童生徒だけをハイライトしたり、さらにその中で個人をフラッシュしたりしていた。全体の中で自身の学校の児童生徒の位置を見ることができ、大変面白かった。

【高橋委員】

「認証」という言葉が随所に出てくる。p.2に生体認証、p.8に顔認証等が記載されているが、それ以外にはどのような認証があるのか。

【渡部専門員兼指導係長】

ローカルあるいはローカルの中の VDI、場合によってはもうひとつ深い層、連携システムのエリアも含めて、理想は一度認証すれば後はそれぞれの入口で顔認証できるような仕組み。それぞれの入り口で ID とパスワードを入力しては教員の活用度が下がってしまうと考えているため、認証のハードルが低い仕組みとしたい。

【高橋委員】

生体認証でシングルサインオンのようなイメージか。

【渡部専門員兼指導係長】

教員のログインはそのようなイメージ。児童生徒は ID とパスワードでログインする。

【小泉委員】

p.8 について。右下の生徒 NW（ネットワーク）で教員が指導用端末を使用する際は、児童生徒と同じネットワークとなるのか。また教室で指導用端末を使っているときには随時児童生徒の情報を見ることはしないのか。

【渡部専門員兼指導係長】

教室の中で指導用端末を使用する際は、大きくわけてローカルで児童生徒と同じネットワークに属する。VDI の中で生体認証を利用してログインし、その VDI で教職員 NW と生徒 NW を使い分けるイメージ。

【小泉委員】

ミライシードを経由して教員 NW へ入るのか。

【四国通建 服部 PM】

ご指摘の指導用端末と児童生徒端末は教員の ID で入れば当然児童生徒の画面データ等が見えなければならない。ログイン ID によって見えるアプリケーションが異なるようなイメージと捉えていただきたい。

- 渋谷区より、資料 1-3（渋谷区による平成 29 年度成果報告）に基づいて説明
- 質疑応答

【玉置委員】

資料上のデータの読み取り方とどのように変化したかをご説明いただきたい。今後さらに周知するためにはその方法を知らせていただくとより良いため、参考としてお願いしたい。

【加藤副参事】

前提として、本資料のデータは公開用に作成している。そのため学校等を特定できないようにわかりにくい表記としていることをご理解いただきたい。データ自体は単純に分析して数値化したものを積み上げている。例として、教員データの場合は ICT

をよく使っている教員がたくさんおり、その中を見ると協働学習の回数を指す項目「協働回数」がある。これはコラボノートの使用回数を計っており、使用しているだけではなくノートを作っていれば協働学習を実施しているとして協働回数としてカウントしている。さらに項目「付箋数」は児童生徒が発言して書き込んだ数を示す。これが1ヶ月に400回を超えているような教員がおり、実際に校長先生と見に行つた際に児童生徒から意見がしやすい協働学習になるよう非常に工夫していることがわかった。このような動きをデータからも読み取れる。前述のような関連性を散在しているデータの中からシステムでうまく紐付けられれば非常に有効だと考えている。

【玉置委員】

横軸は何を表しているのか。

【加藤副参事】

本資料のグラフの場合は学校を表している。教育委員会としては学校による状況を把握したい。

【秋元委員】

p.3の「課題に対するデータ連携・活用イメージ」に「月1回をめぐりに校長へ情報提供し、教職員の授業観察等に活用するとともに、管理職から教職員へ根拠をもって授業改善の指導ができるようにする」とあるが、校長先生は見たいタイミングで見られるわけではないのか。その下にも「各教職員は自らのデータと管理職からの指導、児童生徒のデータを関連付けることで、児童生徒の目線で個に応じた指導が実施できるようにする」とあるが、随時指導を受けられるようにはならないのか。

【加藤副参事】

現在検討中である。かなり時間をかけているが、システムができあがったばかりであるためこれから随時検討していく。少なくとも月1回は情報提供したい。それから実際に行ってみてわかったが、膨大な量のデータを教員がほしい情報へ加工するのは非常に骨が折れる。学校側が随時要求するからといってそれを随時提供するのは非現実的。開発してもらえればそれにこしたことはないが、実際に使える頻度についてはこれから詰めていく。

【毛利委員】

以下2点を参考にいただければ幸い。

1点目。p.4について。「学校情報化先進地域の申請」とあるが、文部科学省で後援していて客観的な数値で全国と比較でき非常によいことだと思う。しかし結果だけでなく、実証が始まる以前との比較もとても重要。4月に他区から新しく渋谷区へ入る教員がいることも含め、どれだけ伸びたかを報告書に記載してほしい。

2点目。p.3,5の協働の回数と付箋数というのは全国学力学習状況調査のb問題の

伸びがどうであったかや、平均ドリル数やドリルを持ち帰って学習している児童生徒の学習の習得状況がどうであったか等を紐づけられれば非常によい結果がでるのではないかと思う。

【高橋委員】

p.7の「システム概念図（H29年度末 想定）」について。教員は閉域網を使っているとのことであれば、自宅からもアクセスが可能なのか。

【加藤副参事】

渋谷区はテレワークを導入しているため、自宅からもアクセス可能。

【高橋委員】

教員が教材レベル等の作業を自宅で行ってよいとしているのか。

【加藤副参事】

勤務時間があるため推進していない。ただおっしゃる通り、最初はタブレットの稼働時間を数値化する話もあったが、そうすると土日等の勤務時間外の稼働も含めてカウントされてしまい、そのような教員を評価するのかという話も出てくる。そのため稼働時間のデータは抜いてしまった。うまく扱わなければならない。

- 新地町より、資料 1-4（新地町による平成 29 年度成果報告）に基づいて説明
- 質疑応答

【藤村委員】

教員用の学習指導用端末にデータを表示させる、またそこで使ったデータを使うとのことだが、それ以外の紙ベースの授業データや児童生徒のつぶやきをどのように活用するのか。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

デジタル上での記録を集計する想定。おっしゃる通り授業の中では紙ベースでの実施も考えられるため、その点については企業とベストな形を協議しながら進める。新地町では7年前からICTを導入しているため教員はほぼICTを使用してくれており、必要なデータは十分集まる範囲内である想定。

【藤村委員】

p.3について。学校ごとに担当を決めているが、次世代学校支援を考えるとこれらの中でどれが最も必要で有効だったのかが欲しいデータかと思われる。全校で実施するが、責任を持つのが資料上で対応している学校という理解でよいか。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

平成 30 年度は各実証校で p.3 で対応している 3 つの取組を専門的に行ってもら。平成 31 年度から対応していないものでも実施してよいとしている。平成 31 年度に

は、このようなシステムが全国的に必要なのではないかというものを新地町として提示していきたい。

【藤村委員】

つぶやき等のアナログ発言への配慮もぜひお願いしたい。

【玉置委員】

担任向けのデータ提供による取り組みはよく理解できた。一方で管理職はどのようにかかわっているのか。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

今後の動きとして、管理職 ID でログインした場合はすべての情報を統括的に見られるようにしたいと企業にお願いしている。また板書記録の評価が始まっているため、エビデンスベースに基づいて教員を指導できるようになる、また励まして教員の指導力を向上するという意味では p.3 の No.8「授業の記録と共有による指導法の改善」が最も管理職向けかと思う。

【秋元委員】

思考力や判断力等、なかなか評価しにくい部分も拾っていくとのことであるが、詳しく説明してほしい。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

指導法としてルーブリック評価を取り入れている。このような姿になれば A 評価だという見本を児童生徒に示し、学習意欲付けと明確な目標を持たせるために取り入れている。それに基づいて教員は児童生徒を評価し、児童生徒は自己評価をする。教員はリアルタイムで児童生徒自身の評価を見て、教員と児童生徒自身による評価の差が大きい場合は声かけで差を埋めていく。自分がどの位置にいるのかを児童生徒がしっかり把握できるようなシステムを作っていければと思っている。

【秋元委員】

p.4 の「KPI（主なもの）」について。「児童生徒の発言回数の増加」や「教職員の残業時間削減」とあるが、教員や学校の変化は具体的にどのようにしてデータを収集するのか。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

児童生徒の発言回数は、コメントの記載量として考えている。そのためデジタル的な発言回数の増加と捉えている。

教員の残業時間は学校へ来たら iPad 上で記録をつけることで取っている。新地町のある福島県では週の残業時間は平均 11 時間未満を目指すよう指定されているが、新地町の残業時間は今年 1 月で平均 9 時間 20 分となっており、県の指標を下回っている。

【小泉委員】

p.13の「セキュリティ」について。「扱う情報によって暗号化等対策が違うことが想定される」とあるが、プロトコルの問題か、レベルの問題か。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

学習系のシステムに対して校務系のデータを入れることを想定しているが、学習系で色で評価されるようなデータについてはレベルが違ってくると思われるため”想定される”としている。テストの結果と出欠状況とは個人情報としてのレベルがある程度異なると考え、セキュリティポリシー上で策定を進めている。将来的に想定されるのではないかということを検討し、暗号化の方法をもう一度検討する必要があるということ挙げた。

【東原委員】

授業・学習系システムと校務系システムを連携するのが本事業のポイントであるが、本日の報告だけを見ると授業・学習系が校務系を使ってよりよいものになっている印象を受けた。初期なのでこのような印象なのか、今後それぞれが進化するのか、あるいは連携した結果の第三のものが今後進化していくイメージなのか。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

現在の想定としては、学習系をバージョンアップしていく想定。校務系はあくまでも情報を吐き出す側として捉えている。今後必要になればスズキ校務との協議が必要かと考えている。

【東原委員】

設計上、学習系を進化させる実証を進めているということか。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

教員が使いやすかつ見て指導に活かせるものにしたいと考えた際、職員室に戻ってその日一日を振り返るとなると中学校では部活動等があるためなかなか振り返りにくい。それであれば指導の中ですぐに把握してすぐ対応したいというのが教員だと思うので、学習系にデータを寄せるという他地域とは異なる取り組みとした。

【高橋委員】

p.13 について。教室の先生用端末からはいろいろな情報が見られるが、職員室からは見られないのか。職員室にも先生用端末ネットワークがあるのか。

【伊藤指導主事兼社会教育主事】

職員室にも先生用端末ネットワークがあり、職員室から同様のものが見られる。もちろん授業中以外にも確認できる。

- 奈良市より、資料 1-5（奈良市による平成 29 年度成果報告）に基づいて説明

● 質疑応答

【玉置委員】

対象教科は算数が中心でよろしいか。学級ダッシュボードが見られることと、学び奈良のテスト結果の財産を活かすとのことだが違いは何なのか。

【谷係長】

算数が中心である。学校現場でのデータ管理において、学級担任は成績評価をつけるにあたり単元テストの得点推移を見ていると思う。しかし組織的な対応としては単元テスト等や期末テストのように学年を超えた推移を見るにあたってはまだまだ甘い理解している。単元テスト単発ではひとつひとつの結果に留まりがちであるため、しっかりと推移を見つつ、児童生徒の状況の変化を捉えられるように今回の事業で実現したいという想い。

【藤村委員】

負担の軽減とデータ活用の視点から2点伺いたい。

1点目。学び奈良の都合で「同じタイミングで一斉に単元テストを実施」するのだと思われるが、教員にとっては負担が相当大きい。したがって学び奈良とは切り離し、教育委員会権限ではなく校長権限で学校ごとに好きな時期に単元テストを実施できるようにしていただきたい。

【谷係長】

おっしゃる通りだと理解している。学力の定着という観点で奈良市の校長会等を通じて理解を得ながら推進している。学校現場の行事の関係等で予定があわないケースもあるため柔軟に対応しながら進めている。

【藤村委員】

2点目。データ活用で中学の期末テストや単元テストではあまりにもデータ量が少なすぎる。それについてどうお考えか。

【谷係長】

ご指摘の通り不足があるため、小テストの取り組みや日常的なさまざまな平常点(校務支援システムへの入力を想定)を組み合わせることで児童生徒の変化を捉えられるよう取り組みたい。

【秋元委員】

p.5について。学力の低位層に対する支援を具体的にどのように行うのか。

【谷係長】

まずひとつは、画面においてはデータをしっかりと可視化し現状を認識する。現状では教員はよい意味で経験の中で児童生徒の状況を把握し、取り組んでいる。この部分をデータを用いて可視化し、教員が感じている状況とデータとのギャップがもしあ

れば、その点は新しい気づきになる。また重なる部分はあればそれは奈良市として課題と捉えている教員の経験不足という部分でありその点を補完する形になるため、教員の自信にもつながる。前述のような取り組みの結果、可視化された苦手部分のある児童生徒に対して Recommend シート等を活用する。ただしシートを渡しただけでは全員がシートを解くとは限らないのが実態。そのため児童生徒へ個別の支援やフォローを行う。しかしそれを担任だけが行うとなると負担が増えるため、組織的な取り組みとしていきたい。

【毛利委員】

単元テストを奈良市の小学校すべてで行うのであれば、対象校とそれ以外の学校との比較を行っていただきたい。また児童生徒によって問題集を選ぶとあるが、選択は AI で行うのか。

【谷係長】

AI の定義にもよるが、Recommend と呼んでいるものは児童生徒の間違い傾向や間違った問題に対し、おそらく学び切れていないであろうという部分をデータ分析の結果導き出したもの。そうして導かれた児童生徒の苦手部分にフォーカスをあてた問題を出す。そのような意味では AI という要素もある。

【毛利委員】

それはすごいこと。小学校では単元テストを採点して終わりではなく、満点を取るまで同じテストを繰り返したりしている。そのため Recommend された問題集を解いた後にまた単元テストを行うと本当の力がつくのではと思う。

【高橋委員】

p.7 について。校務館はサーバーが置いてある場所か。

【富士通 蛸子 PM】

校務館は校務支援システムであり、資料上の薄いブルーの枠内が校務系ネットワークの中にあるという意味合いである。

【高橋委員】

パブリッククラウドをお持ちなので、そこにデータを寄せて皆で共有し児童生徒が自分の成績情報を見られるような設計にするという発想もあると思うが、奈良市はそうではない。どのような経緯で現在の設計となったのか。

【富士通 蛸子 PM】

まず考え方として 2 点ある。さまざまな分析結果を共有という観点では最も配分しやすい方法でパブリッククラウド等に置くのがひとつの選択肢だが、一方で元データそのものをどう秘匿して安全に守るかという観点があると思っている。来年度に向けてポータルシステム、つまり可視化して分析した結果を置くシステムが別の形で増え

るとご理解いただければ幸い。それらをどの領域に置くかについてはさまざまな観点があるかと思うが、セキュリティレベルに応じて検討していきたい。

【高橋委員】

学習系端末からパブリッククラウドにつながると児童生徒は他の教材にアクセスできなくなるのではないか。

【富士通 蛭子 PM】

資料上ではあるシステムに特化して書いている。他のシステムは当然使えるよう配慮している。

【清水委員長】

ご説明いただいた点がわかりやすい図にさせていただいた方がよい。

(3) データ活用モデルの整理について

- 事務局より、資料 2 に基づいて説明

(4) スマートスクール・プラットフォーム標準化について

- 事務局より、資料 3 に基づいて説明

(5) 効果検証 WG について

- 文部科学省より、資料 4 に基づいて説明

(6) まとめ

- 文部科学省より、資料 5 に基づいて説明
- 清水委員長より講評

【清水委員長】

本事業で最も重要なのは授業・学習系システムと校務系システムとのデータ連携。本日の現状報告によると、各実証地域は学習系の発展に集中しているきらいがある。しかし校務系との連携により質の向上をはかることが目的であると常に念頭に置いていただきたい。日常的に連携データを活用することが重要であり、年度末のみ等の一時的な連携では評価にはつながらない。

本事業は難しい問題を扱っている。したがって非専門の方、特に教員等の教育関係者にとってわかりやすい表現と説明をぜひお願いしたい。また重要なことは、教育関係者への負担が増さないこと。負担が増したとを感じる形ではよいものであっても普及しないため、その点を配慮していただきたい。

各実証地域がエビデンスベースで効果検証をしてくださり、各実証地域でそれぞれ

	<p>の特徴が出ている。事務局は委員の方々や地域の先生方等と相談しつつ、よい形でまとめあげての公表をお願いしたい。</p> <p>効果検証 WG では政策的に打ち出したこの事業全体としての評価を行う。このように連携することにより、今後のためにこのような素晴らしい成果が出たということを示したい。経年変化が重要である。もう 1 点はデータ連携をしたことの分析。校務系のデータ、アンケート等による意識調査、しかしこのデータと出席等の校務系データ、出席状況等の校務系データを分析することは可能と考えている。小学校には担任の先生がいるため、この授業に関係された担任の先生のこのクラスの児童生徒がその他のクラスの児童生徒とどう違うのかということは、個人は特定せずにその関係をうまく分析していただくことにより直接データ連携により指導された方とそうでない方との関係等が出てくると信じている。</p> <p>責任を持って私が分析するつもりでいるため、結果が出た際には相談させていただきたい。分析した結果こうなった、学校現場として教育の観点で本当にそうらしいということをおっしゃっていただきたい。もちろんこれは違うというデータも結果として出てくるので、そこはよく議論したほうがよい。</p> <p>(7) 閉会</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
備 考	